

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730790

研究課題名(和文) 高等教育における女性の学びと教育の環境構築に関する日米の比較研究

研究課題名(英文) Women's Learning in Higher Education: A Comparative Study of the U.S. and Japan

研究代表者

虎岩 朋加 (Toraiwa, Tomoka)

名古屋大学・教育学研究科(研究院)・助教

研究者番号：00566721

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、高等教育における女性学生の学びや成長の経験を理論的・実証的に探究することを目的とした。社会・人文科学を専攻する日米の博士後期課程在籍女性学生及び若手研究者を対象にした実証的研究と、女性たちの学びや成長についての認識を考察するための理論的探究をおこなった。高等教育機関は、言説と社会制度への不適合の感覚をもつ女性たちの制度的な受け皿としてあり、また、高等教育での学びは、そのような女性たちに既存の言説では語りえない言葉(言説)を開発するためのツールを提供するものとしてあることを明らかにした。高等教育機関での学びは、女性のエイジェンシーを表現することを可能にするツールをとして捉えられうる。

研究成果の概要(英文)：In this study, I explored women's learning in higher education both empirically and theoretically. I conducted interviews with doctoral students, post-doc students, and researchers in the United States and Japan. I also engaged in theoretical research to understand the women's interpretations of their learning.

I found that both the social institutions in which the women were located and the availability or unavailability of concepts able to frame the interpretation of their experiences combined to shape the ways in which they expressed their experiences, as well as the meaning that they gave to their Ph.D.

This research concluded that higher education institutions offered an institutional space to women who felt a degree of estrangement from society, and that their learning in those institutions provided them with tools to develop their own sense of identity. Higher education learning, indeed, can be regarded as a tool that enables women to express their own agency.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育社会学

キーワード：ジェンダー 高等教育 学び 言説 エイジェンシー 女性学 フェミニスト教育学 自己生成論

1. 研究開始当初の背景

アメリカにおいては、高等教育における女性の学びの経験や、どのような教育行為が女性学生の学びや成長を導くかについての研究の蓄積がある。それらの研究に貢献してきたのは Women's Studies という学問分野である。Women's Studies は 1960 年代の終わりに登場し、哲学的観点、教育学の観点、社会学的観点、人文学的観点、科学的観点などに基つき、高等教育機関や学究の世界において複層的に抑圧され周縁化されてきた女性を、知の創造という行為の中心に据えてきた。特に本研究で注目したいのはフェミニスト・ペダゴジーという教育行為である。この教育行為は、女性学生が自己の学びに責任を持ち、社会・自己・他者の偏見や差別的思考を反省的に考察し、これまで蓄積された学問知識を女性の観点から批判的に考察することを目的としている。そして少人数での教育を実践し、クリティカル・シンキングやリフレクティブ・シンキング、ファシリテティング・スキルの育成などを重要な学習成果として掲げる。

以上のように、アメリカではこれまでの学問体系やそのあり方に疑義を唱える Women's Studies などの学問分野によって、高等教育機関での女性の学びと教育行為との関係性を明らかにする試みが理論的および実証的に行われてきた。他方で、日本においては高等教育機関での女性の学びと教育行為との関係性を分析、明確化しようとする研究は少ない。

研究代表者は、これまでの研究において、アメリカの大学の Women's Studies の学生の成長と学びに関する諸相を探求した。卒業生や元教員、現教員とのインタビューを通じて、教師の教育行為の中に根付くエネンブリング・パワー (enabling power) が、ケアリングという形態をとって、教師と女性学生の学びの連鎖を形成し、学生のエイジェンシーを通じた学びを促進することを論じた。

以上のような研究成果に基づき、日本でのこれまでの研究では特に論じてこられなかった高等教育における女性学生らの学びの形成の過程と教育行為との関係性を分析し、女性学生を成長と成功に導く教育行為や学びの環境を明らかにする必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、高等教育機関における異なる教育分野での教育行為と女性学生らの学びの形成過程との関係性を分析する。いかなる教育が女性学生らの学びと成長を促すのか、いかなる教育が女性学生らを学究者としての将来のキャリアへと導くのか、女性学生と教師の学びの連鎖はどのように起こっていくのかという三つの問題を設定する。そして、高等教育機関における教育の女性の学びへの影響、学究世界に女性学生を導く教育のあ

り方、女性教員が学生であった時の教育の経験とその影響に関する自己省察を分析する。

言い換えれば、本研究は、高等教育機関での女性学生の学びや成長の経験を理論的および実証的に探究することによって、高等教育機関でのいかなる教育が学生らの学びにより豊かな結実をもたらすのかを検証し、女性の学びの観点から高等教育機関における教育行為を分析、明確化する。

3. 研究の方法

本研究は、高等教育機関における異なる教育分野での教育行為の女性の学びへの影響を理論的、実証的に検証することを目的とする。理論的には、研究代表者が提示したエネンブリングという教育のあり方について考察を深める。実証的には、日本とアメリカの高等教育機関においてインタビュー調査を実施する。

インタビューで明らかにする項目は以下のとおりである。

1. 女性は高等教育での異なる学問分野の学びの経験と成長の経験をどのように語るか

2. どのような教育行為が女性らを学究世界へと導いたと女性らは考えているのか

3. 高等教育機関の将来の教師としてどのような教育実践を取り入れたいと考えているか

実証的側面に関して言えば、本研究では、2011 年度から 2013 年度の間に、高等教育での女性の学びの経験に関するインタビューを日本と米国で行った。インタビューの対象としているのは、日本および米国での研究総合大学の社会科学と人文科学の分野の女性で、博士後期課程 (doctoral programs) に在籍する学生、ポスドク、大学教員 (職について 5 年以内) たちである。

インタビューの内容をデジタルレコーダーに収録し、それを研究成果として発表することについても同意を得た。女性たちの選定は、雪だるま方式によって行っている。インタビューに応じてくれた女性に、さらにインタビューに応じてくれそうな女性を紹介してもらおうという方法である。この方法の欠陥としては、同じような経験を持つ人々しか集まらないということがあげられるが、しかし、本研究は、サンプルを収集して、そこから一般的な原則を帰納することを目的としないため、その欠陥によって、本研究の意義が損なわれることはないと考える。

インタビューで尋ねたのは、博士後期課程への進学、専攻の選択、学びの経験、大学の教員や同級生、後輩、先輩との関わり、キャリアパス (あるいはキャリアプラン)、彼女たちの選択に与えたと思われる影響などについてである。教育経験がある場合にはそれについても質問した。インタビューは、カフェや彼女たちのオフィスや、教室など彼女たちが希望する場所で行った。同意が得られ

ば、調査者のオフィスでもインタビューを実施したこともある。インタビューは一時間から二時間程度としたが、四時間に及んだものもある。また、一部女性とは複数回のインタビューを実施した。インタビューを形式的にしないように努め、質問事項は、はい、いいえで答えられるようなものではなく、発展的な対話にいたるような導入として用いられるようなものを選んだ。

インタビューのテープ起こしをした後、発言内容にコーディングを施し、コーディングとインタビュー内容を何度か行き来しながら、コーディングを整理し、関連するコーディングをまとめ、主要なテーマを決定していった。本稿の執筆時点では、日本と米国でのインタビュー参加者は合計で 31 名である。31 名のうち 16 名はアメリカでのインタビューであり、内 2 名がアジア系である。彼女たちの年齢は、20 代後半から 40 代前半にわたっている。

インタビューの事例によって、すべての女性の大学院での学びの経験を一般化することを、本研究は目的としていない。本研究は、高等教育での学びの経験が実際にどのようなものであるかということを一一般化することではなく、それらの経験が、女性たちにどのように認識され、感じ取られ、解釈されているかということ、彼女たちの語りを通して描くということであり、このことを通して、彼女たちがおかれている制度と彼女たちの言説実践が、彼女たちの認識や感覚、解釈をどのように形作っているかということを示すことである。

理論的側面に関して言えば、本研究においては、女性学における「言葉」(言説)の問題にかんする議論の整理、ジョン・デューイの成長と経験にかんする哲学的考察、およびリウス・イリガライの差異の哲学を通じた教育関係の構築にかんする考察を行うことによって、エネイプリングという教育のあり方、ならびに、高等教育における女性の学びの経験とこれらによるその解釈を適切に分析するための理論的枠組の構築を目指した。

4. 研究成果

本研究は、社会科学・人文科学を専攻する日米の博士後期課程在籍女性学生、若手女性研究者への聞き取りで、実証的な観点から以下のことを明らかにした。

- ・ 後期課程に学ぶ(学んだ)進学したアメリカの女性たちは、高等教育に実際的な価値(給料、地位、職業など)を見いだしているのに対して、後期課程に学ぶ(学んだ)日本の女性たちは、高等教育の価値を具体的明瞭な言葉で表現することができない。
- ・ 後期課程に進学した日本の女性たちは、「向いていない」という感覚 社会一般の通念や既存の社会制度との不適合の感覚 を共通してもっている。

- ・ 博士後期課程での学びや、研究者としての活動は、「向いていない」感覚との格闘のなかで、社会の中に自己を位置づけ、自分自身の言葉を開発していく女性のエイジェンシーの何らかの働きと考えられる可能性がある。

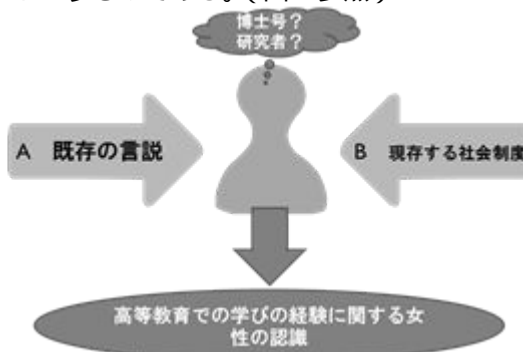
また、理論的な観点から以下のことを究明した。

- ・ 女性学では「言葉」(言説)の問題は女性の自己形成との関わりから重要な問題として位置づけられてきた。
- ・ ジョン・デューイが理論化する「言葉を絶するもの the ineffable」を、日本の女性たちが示した「向いていない」感覚との格闘 言葉には何らないものを言葉にしようとする格闘 との関わりで、高等教育の学びの中に、理論化し直すことができる。
- ・ リウス・イリガライの差異の哲学から解釈可能な教育関係は、既存の言説に規定された教育関係とは異なる教育関係-エネイプリングの教育-を想像する手がかりを与えてくれる。
- ・ ジョン・デューイの成長にかんする哲学的議論およびリウス・イリガライの差異の倫理学にかんする議論は、自己を他者との関係性や環境の中において絶えず再構築していくあり方「成っていく」あり方、すなわち自己生成という成長のあり方を理論化することを可能にする。

以上の実証的理論的研究を通じて、本研究では、高等教育における女性の学びの経験の質的な解明を可能にする独自の分析枠組を構築した。すなわち、

A 女性たちがそれをもって自己自身を語ることで既存の言説と、B 女性たちに目に見える形でキャリアパスを用意する現存する社会制度、A と B の両方が交差するところに女性たちの高等教育における学びについての語り形成される

というものである。(図1参照)



(図1「女性の学びの分析枠組み」)

この分析枠組を用いて、言説と社会制度への不適合の感覚をもつ女性たちが、その感覚との格闘としての、自己自身の言葉の開発や、自己自身のあり方の探究の中で、(積極的ではなくとも)後期課程に進学し、研究者

になる道を選ぶことを、本研究は明らかにした。高等教育機関は、これらの女性たちの制度的な受け皿としてあり、また、高等教育での学びは、そのような女性たちに既存の言説では語りえない言葉（言説）を開発するためのツールを提供するものとして捉えうることを意味する。すなわち、女性のエイジェンシーを表現することを可能にする（enable）ツールとして高等教育機関での学びを捉えることが可能であることを、本研究は明らかにした。

今後の課題としては、(1)本分析枠組みを用いた研究対象を広げること、(2)インタビュー中多くの女性によって示された、ルサンチマンの感覚 それはエイジェンシーを表現すればするほど深くなるようである を考察する理論的枠組を構築することである。(1)について言えば、具体的には、対象を学部女性学生に広げ、彼らの自己に関する認識と社会の中での自己の位置づけに関する認識、および今後のキャリアを含めた自己の形成に関する認識を、自己生成論の観点から究明したい。(2)について言えば、高等教育での学びを通じて、制度と言説の間のなかで、自己自身の言葉を開発し、エイジェンシーを表現することが可能になった（enabled）と解釈している女性たちの多くが、他方で、そのことについてルサンチマンを感じているというパラドキシカルな状況をインタビューを通じて垣間見た。これについて、理論的に説明しうる枠組みを、本研究は持ち合わせていない。したがって、このエネイプリングな教育がもたらすパラドクスの状況を究明する理論的枠組の構築が求められると考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 5 件)

虎岩朋加、伊藤博美、藤原直子（2014 掲載決定済）「教育学におけるフェミニスト・アプローチの豊饒性 ベティ・フリーダン、J.R.マーティン、ベル・フックスの観点」『教育哲学研究』109号

虎岩朋加（2014 掲載決定済）「反省性のうちの言語を絶する位相と経験の再構築 ジョン・デューイの反省的思考のフェミニスト教育学への援用」『日本デューイ学会紀要』55号

虎岩朋加（2013）「博士号と大学院進学に女性たちが見いだす意義 インタビュー調査に基づく日米比較分析」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』60巻一号 13-23頁

虎岩朋加（2013）反省的思考(reflective

thinking)と棲みかへの帰還(returning to dwelling) 他者との関係性と自己形成の観点からのデューイとイリガライの対話の試み」『日本デューイ学会紀要』54号 121-131頁

虎岩朋加（2011）ジョン・デューイの「想像(imagination)」の可能性 道徳行為の究極的働きとしての愛(love)に注目して」『日本デューイ学会紀要』52号 151-160頁

〔学会発表〕(計 9 件)

Tomoka Toraiwa (2011) “How to enable an other: Rethinking power through Irigaray's love,” a paper presented at the Seminar of Luce Irigaray, June 17th, 2011, Bristol University, England

虎岩 朋加（2011）「反省的思考と棲みかへの帰還:自己形成の観点からのデューイとイリガライの対話の試み」個人発表、日本デューイ学会第55回研究大会、2011年10月2日、関西学院大学

虎岩 朋加（2011）「リュス・イリガライの差異の倫理学における承認の概念:教えることへの示唆」個人発表、教育哲学学会第54回大会、2011年10月15日、上越教育大学

Tomoka Toraiwa (2013) “Women's perception of the meaning of a Ph.D. degree: A comparison between the U.S. and Japan,” a paper presented at Comparative and International Education Society the 57th Annual Conference, March 12th 2013, New Orleans, Louisiana, USA

Tomoka Toraiwa (2013) “Bringing Life into the Classroom: Luce Irigaray's Democratic Vision applied to Education,” a paper presented at Luce Irigaray Circle Conference 2013: Thinking Life, June 5th 2013, Bergen, Norway

虎岩朋加（2013）「経験に根ざす反省性 (reflectivity) ジョン・デューイの思考の方法のフェミニスト教育学への援用」個人発表、日本デューイ学会第57回大会、2013年9月21日、新潟青陵大学

虎岩朋加、伊藤博美、藤原直子（2013）「教育学におけるフェミニスト・アプローチの豊饒性 ベティ、J.R.マーティン、ベル・フックスの観点」ラウンドテー

ブル、教育哲学会第56回大会、2013年10月13日、神戸親和女子大学
虎岩朋加(2014)「大学におけるジェンダーと女性学」、個人発表、日本応答教育学会研究集会、2014年1月12日、名古屋大学

Tomoka Toraiwa (2014) The Power of Dewey's Idea of the Ineffable: Education and Growth in Multiplicity, a Paper presented at the 60th annual conference of Philosophy of Education Society, March 16th, 2014, Albuquerque, USA

6. 研究組織

(1) 研究代表者

虎岩 朋加 (TORAIWA, Tomoka)

研究者番号：00566721